

「授業改善のための学生アンケート」2025 年度前期 顕彰授業における工夫

2025 年度前期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。

【参考】顕彰の対象となったアンケート項目は以下の 6 項目です。

- Q7 教員の説明はわかりやすかった。
- Q9 教科書や配布資料など、教材は適切だった。
- Q10 学生の質問や相談に対して、教員の対応は適切だった。
- Q14 この授業に主体的に取り組むことができた。
- Q15 この授業の内容に興味を持つことができた。
- Q16 この授業の内容を十分に習得できた。

< 少人数部門（履修者 6～19 名） >

「専門ゼミ I」 畠山 香奈 先生（文学部フランス語フランス文学科准教授）

2025 水 2 前期 フランス語フランス文学科専門科目

「専門ゼミ I」では、17 世紀フランスの演劇とギリシア神話をテーマに授業を行っています。ルイ 14 世に象徴される 17 世紀フランスと現在の日本にはあまり共通点がないように思われますが、当時の芸術作品の源泉であったギリシア神話に着目すると、人間のあり方や人間関係など、複数の現代的なテーマが浮き彫りになってきます。「専門ゼミ I」は、資料の読解とディスカッション、発表という流れで進めていて、特別なツールは何も使っていません。このようないわば古典的な授業に学生たちが主体的に取り組み（Q14）、興味を持ってくれたこと（Q15）を大変うれしく思います。授業の工夫と授業をしていて気づいた点をいくつかご紹介させていただきます。

○ ディスカッション—フィクションをとおして自分について考える面白さに気づいてもらう

ゼミでは、「日常とまったく違う世界をとおして身近なことについて考える」をテーマとしています。2025 年度は、モリエールの『守銭奴』と、「アモルとプシュケ」を扱って授業を行いました。ゼミ生には、フランス演劇やギリシア神話の基礎知識を求めています。なので、毎回授業内容に関連した身近なディスカッションのテーマを設定することで——たとえば、「パリスの審判」がテーマの回は「美しさを競うってどう思う？」がお題でした——、学生たちが授業内容を理解し、積極的に発言できるように工夫をしました。

○ 身近な例を用いて説明をする（Q7）

後期のゼミでは、学生たちに発表をしてもらいます。その準備として、「専門ゼミ I」では、佐々木健一『論文ゼミナール』（東京大学出版、2014 年）を参照しながら、スターバツ

クスのロゴやディズニー作品の『リトル・マーメイド』などを例に、発表の仕方、問いの立て方について解説をしました。

○ 学生たちが主体的に取り組める環境づくり

リアクションペーパーを読むと、しばしば「みんなが違う意見でおもしろい」というコメントがあります。そのため、ゼミでは席替えをして、毎回異なるゼミ生とペアになってディスカッションをしています。自分とは違う意見を聞き、双方の意見をまとめて発表するという流れで進めています。

○ 工夫の限界に気づく

以上が授業運営で工夫している点ですが、工夫の限界に気づいたことも重要な気づきのひとつだと思っています。教員は、授業のねらいや到達目標を設定していますが、さまざまな意見が出て、議論がおおいに盛り上がり、教員の当初のねらいとはまったく違う結果が生じることがあります。こうしたことが「授業は生き物」と言われるゆえんだと思いますが、このような想定外の展開を楽しみ、学生に学ぶ姿勢も大切な心掛けだと思っています。

< 多人数部門（履修者 20 名以上） >

「書道」 中野 和博 先生（文学部国語国文学科非常勤講師）

2025 火 2 前期 国語国文学科専門科目

白百合女子大学の書道は、学生が将来的に教える立場になることを踏まえた授業にしなければならないため、高校の教科書を参考に授業を組み立てています。特に毛筆を扱う基本に力を入れて。

毛筆には硬筆にない「弾力」があります。それを活かした筆使いが大前提となります。が、ほとんどの学生は弾力を意識して書いたことなど一度もないのが実情です。そのため、実技指導はまずはこちらが実際に解説しながら書いて見せる。その後に筆と一緒に持って書いてみる。解らない・上手いかない等には何度でも助けに行く。という進め方で入っていきます。

この書いて見せるという範書と、学生の道具を使って一緒に筆を持って書く、そして手を挙げればすぐに駆けつけてアドバイスする、の三つが工夫といえ工夫でしょうか。

筆使いには基本の基本だけでなく、癖のある筆使いもあれば、これは変と感じてしまうようなものまで幅広く、また楷書から行書など書体は五つあります。そのため字形や全体のバランスまで注意すると無理がきてしまうと思っているので、私の指導は筆使いだけ注意すれば良い、とすることが中心です。この字形を良く、つまり見た目をキレイにしなくても良いんだ…という指導は学生には新鮮らしい。この指導方法も工夫になるのかもしれませんが。

これからも学生が「なるほど」と解りやすい説明と、「できた・書けた」という実技指導を実践していきたいと思います。

